

京都大学図書館の現地点

附属図書館長 菊池光造

京都大学附属図書館は、今年開館百周年を迎えた。この間、図書館は歴代館長の先生方や数多くの図書館職員みなさんの努力に支えられて発展してきたのであり、この機会を借りて、まず京大図書館の発展に寄与してきた方々にお礼を申しあげたい。現在京都大学図書館は、附属図書館を中心に64の部局図書館・室によって構成され、蔵書数約560万冊(附属図書館所蔵分80万冊)、入館者は附属図書館だけをとっても年間約75万人、したがって1日平均2500人(定期試験の期間には約5000人)をかぞえ、また電子図書館化の先行館の一つとしても活動を続けている。

「図書館」といっても、いまや学術情報、いや広くいって知的情報は、もはや活字と紙のみならず、画像・映像・音声・音響による情報の創造・伝達・保存・利用がおこなわれるマルチメディアの時代であり、図書館もマルチメディア図書館化しているわけだが、中でも情報の電子化による「電子図書館」の展開は刮目に値する。

私は、こうした状況を「ハイブリッド型図書館の時代」と呼んでいるのだが、これからの大学図書館は、従来型の書籍・活字資料を中心とする「従来型図書館」と電子化された学術情報によるいわゆる「電子図書館」とが併存・補充しあい、分かちがたく結びついたものとして展開することになる。京都大学図書館としては、双方を充実させつつ、いかにシームレスかつ効率的に図書館全体の機能を展開するかが課題であるといえよう。

ところで京都大学電子図書館は、本格的にオープンしてから、まだ2年足らずであるが、画像14万枚に及び、古典籍や明治維新資料など京都大学らしい特色を持つものとして、幸い好評を得ており、海外からのアクセスも増加している。図書館電子化をめぐるのは、本号の中でも現状報告がなされると思うので、ここでは一言

ふれるのみにとどめるが、情報発信の面では、学内での研究状況・研究成果をいかにコンテンツの中に盛り込んでいけるかが課題であり、情報配信の面では、



オンライン電子ジャーナルのタイトル数をいかに増やしていくかが課題だといってよい。とりわけ後者については、外国雑誌の値上がりが激しく、一方で購読のための予算が増えないという状況のもとで、国立大学共通の悩みを解決するためにも、コンソーシアムによる共同購入等の工夫を重ねて、何とか研究者のニーズに応えるような前進を図らねばならないだろう。

いまひとつ、図書館電子化をめぐるのはOPAC (Online Public Access Catalog) の問題がある。図書情報のオンライン検索は圧倒的な利便性を持っており、学生諸君の中には、カードシステムに馴染めず、OPACで出てこなければその本や資料は存在しないとさえ思い込む人が増えている。しかし、実際のところ学内でOPAC検索できるのは1985年以降に受け入れた約100万冊の書籍のみであり、京都大学図書館百年の蓄積である全学560万冊余の全蔵書から見れば、その6分の1に過ぎない。1日も早く全蔵書の「遡及入力」をおこなってOPAC化をせねばならないのだが、これには膨大な費用が必要となる。これも国立大学共通の悩みであるが、さいわい、今年6月にまとめられた学術審議会答申(「科学技術創造立国を目指す学術研究の総合的推進について」)の「中間まとめ」において、大学図書館を軸にした図書資料の効率的な相互利用、その前提となる「遡及入力」の重要性の指摘が盛り込まれた。ようやく経費

要求の公的な拠り所ができた今、国立大学図書館協議会での共同事業として、ぜひ一挙的な遡及入力実現の方途を探らねばなるまい。

さて京都大学図書館では、百周年事業の一環として、今年図書館の「外部評価」を実施していただくことにしている。この百周年を機会に、学外の専門家たちによって、専門家の目で京都大学図書館の現状を分析し問題点を指摘していただき、これからの図書館のあるべき姿、取り組むべき課題を明らかにして、京都大学図書館の進むべき方向、改善のための手がかりにするのが目的である。京都大学図書館の百周年は、まさに世紀の変わり目の年と重なった。独立行政法人化の動きなど、大学および大学図書館を取り巻く環境・条件が急激に変化しつつある現時点で「21世紀に向けて・・・」とまで大きく構えることはむしろ不適切であろうが、少なくとも中期的スパンで図書館の取り組むべき課題を明らかにしたいと考えている。

その外部評価のための資料として、すでに図書館利用者のアンケートを実施した。アンケートは全学規模で各部局図書館・室を含めて実施したが、短期間にもかかわらず多くの方の協力を得ることができた。現在その集計と分析をおこなっているところである。いうまでもなく、京都大学図書館は、研究図書館的性格の強い部局図書館・室と、一般教養・教育図書館的色彩

の強い附属図書館とによって構成されているわけだが、今回のアンケートを通じて、いかに多くの学部学生たちが附属図書館に対する要望をもち期待を寄せているかを、改めて認識することにもなった。いずれにしても外部評価の前提には、自己点検・自己評価こそが必要であり、附属図書館自体については、現在アンケート結果も参考にしつつその作業を進めている。

ところでアンケートは各部局図書館・室の利用者の声を聞くものでもあった。この機会に、ぜひ各部局図書館・室においても、アンケート結果も参考にしながら、自主的に各部局図書館・室の「現状と課題」を明らかにする作業に取り組んでいただきたいと願っている。

京都大学では、部局自治の意識が強烈であり、図書館の運営についても各部局の独自性が強い。全学60余に及ぶ部局図書館・室相互については、従来「調整された分散主義」という言葉が使われてきたようだが、アンケートを瞥見する限りでも「もっと垣根を低くして学内諸部局図書館・室間の相互利用を容易にすべきだ」という声もあり、この機会に、「調整」の中身も再検討しながら京都大学図書館システム全体として、利用者の期待に応えることのできる、効率的なシステムを作り上げて行きたいと考えているところである。

(きくち こうぞう)



OPAC及び電子図書館で検索中の利用者



『今昔物語集』などが保管されている貴重書書庫